
twilight world

江角 稚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t w i l i g h t w o r l d

【Nコード】

N 6 7 0 4 X

【作者名】

江角 稚

【あらすじ】

とある男の逃亡日記。

今、言えるのはそれだけです。そもそもt w i l i g h tとは、はつきりしない状況、やみの部分、”と言う意味ですから。”

曖昧なる世界に、包まれて見て下さいませ。

第一話（前書き）

ちよこちよこ書き溜めて、しばらく溜まったら投下する…と言うつ、マイペースな物を一つ作ろうかと。

頑張つて”ハイペースなマイペース”になれば良いのですが。

とか言つて、また散策するのでしょうか。理由は、ネタ探しです。

第一話

「俺は女を殺した。殺してしまった。じきに警察が、此処にやって来るだろう。その前に、逃げなければ。どうしても此処から、逃げ出さなければ……」

そして気がついたら、俺は狭い裏路地にいた。薄暗さが奇妙な温もりを作り、俺を匿うように抱いてくれる。

さて、どうしたものか。

俺はひとまず落ち着いて、呼吸を整えてから考えた。

…随分と走ったようだ。周りの景色が、何もかもが分からぬ。まるで、異国の地へと迷い込んだようだ。

土地勘がなければ、逃げるのは不利だ。かと言って、自宅へ帰る気にもなれない。

もしも俺が殺人犯だと知れたら、捕まってしまうから。どうしても俺は、捕まることを避けねばならない。

幸い、仕事も尋ねて来る友人もない。親も、とっくの昔に亡くなった。俺が帰らなくとも、不審がる人物などいない。

かと言って、いつまでも逃げ続ける訳にもいかないのだが。

一体、どうすれば良いのだろう。

しかし、疲れた。これ程の距離を走ったのは、久しぶりだ。
ああ、もう駄目だ…。

また、意識は遠退いていった。

朝だ。俺はこのまま、一夜を明かしたらしい。人通りの少ない道が
幸運をもたらしたのか。それとも、ただ酔い潰れたサラリーマンに
しか見えなかったのか。

どうでも良いが、こんなラッキーがいつまでも続くとは思えない。
今晚は、何処か別の場所へ行かなくては。

それにしても…腹が減った。喉も渴いている。

それもそうだ。夕べから、何も口にしていないのだから。

夕べは、何があっただんだけ。
上手く思い出せない。

白く細い、女の首筋。

跳ねる喉。

力を込めた指先。

そして、事が終わった後に押し寄せる、引っ掛かれた傷の痛み。

…ああ、そうだ。

俺は、逃亡中の殺人犯だったっけ。

ふと見ると、両腕には引っ掻き傷が残っていた。まるで、断末魔の叫びを腕に描いたような美術性。

その刻み込まれた作品に、俺の興味はちつとも湧きもしなかったが。

ただ、痛みはない。

残ったのは、ただのミミズ腫れだけだ。

勿論、この傷を見たからと言って、心が痛むこともなく。

何と無く、傷が癒える頃には殺人のことも、綺麗さっぱり忘れられる気がした。

第二話

この見知らぬ街をさ迷うこと、三時間。
初見の地は不慣れだ。

…しかし、地図を買う訳にもいかず。

もしこのタイミングで地図などを買ひ、俺がこの街の新参者だと世間に知れたら——疑われることこの上ない。

と、言う訳で。

仕方なしに、徒歩で巡る。昼間とは言え、人通りの多い街を。

もしも今が冬なら、コートの襟を立てて顔を隠すことも出来るのだが…あいにく今は、望みとは正反対の季節だ。

——いや。正確には、もう夏ではない。

暦上では、もう九月下旬だ。それなのにこの残暑とも言つべき蒸し暑さは、真夏を感じさせる。特に、頭上でギラギラ照り付ける太陽とか。

夕べはアスファルトからなる路上で眠ったからか、腰も痛いし眠気も覚めない。きっと眠りが浅かったんだ。——もしくは、殺人のために興奮して眠れなかったか。

それでも、女一人殺し、この街まで命からがら逃げ切った疲れで気を失った、とも考えられるが。

…とにかく。

眠い。…眠い。ねむい。

その三文字が、頭の中をグルグルと駆け巡る。

”眠いなあ…” 声にならないため、心の中で呟く。

そう、喉は未だに渴いたままなのだ。さっき自販機は見付けた。だが、残り少ない小銭を使いたくなかったのだ。

ちくしょう。札入れも通帳も、全部家に置いて来ちまった。

… たまたま小銭入れが上着のポケットに入っていたのは、不幸中の幸いなのだが。

表通りは目立つため、脇道に入る。そして裏道の入り込み具合に驚いた。

”まるで… 迷路だな”

迷子になったら最後、抜け出すことも難しい。いや、いざとなったら隠れやすい、とも言い換えられるか。

そんなことを考えていると、前から大勢の人がやって来た。

第三話

一体、誰だ？

建物の陰になっっているため、薄暗くてよく見えないが……。

まさか。

警察？

もう、此処まで追いつかれたのか。

やはり税金の無駄遣いではない。きっちりと仕事はしているのか。

仕方ない… 此処で捕まる…

… 訳には行かない。

俺は、周りを見渡した。

しかし細い路地は両側とも壁だ。逃げるための脇道もない。

引き返すか… 振り返ると、向こうからも人々の気配。

—— 挟まれた。

悟った、捕まることを。

逃げなくては。

… 分かっているのに、体は動かなくて。

両方向から近付いて来る姿なき敵は、まるで示し合わせたかのように、同時に目の前に現れた。

…不良？

いや、違う。かも、しれない。

鉄パイプやバットを引きずり、近付いてくる集団。それだけ見れば、不良に見えなくもない。

——って、

やばいな…この状況。

どうするか。どうするよ？

ってか、本当にどうすんの？

「おい」視界右側、先頭の男が話し掛ける。「有り金全部寄越せ」

「…どちら様、ですか」掠れた声を絞り出すように、言った。喉の渇きからか、恐怖からか。

見た所、不良とは違うようだが。武器は持っているし、数が数だ。これは…どうしたことだろう。

もしかすると、私服警官かもしれない。…にしてみれば、ガラが悪過ぎるが…。

「お前に名乗る名など、ない」男は答える。「とにかく、財布を渡して貰おうか」

「…無理だな」俺は正直に言った。「訳あり、でな。財布はない」

財布は。

小銭はあるが…当てにならない程度。
しかも、それを取られたら生活出来ない。

「財布がない…だと？」男は問う。

「ああ」…声が、出なくなってきた。

「馬鹿にするな。今の御時世、何処に手ぶらで出歩く奴がいる」苛立たしげに、男は金属バットをアスファルトに打ち付けた。ガギイン、と、嫌な音を響かせる。

「いるさ、此処に」強がりと言う。しかし、状況は良くない。細い路地裏で、逃げ道はない。左右を武装した？男達に囲まれている。

俺は周りをざっと見た。

感想。…多い。

何だこれは。二十人ずつ、計四十人と言った所か。まるで不良クラスを丸ごと路地に押し込んだようだ。

…何で俺は、こんなに冷静なんだろう。

強行手段に出た男達が、一斉に、金属製の物体を振りかざしていると言っのに。

何か、叫び声が聞こえる。だが、何と言っているのか分からない。

「やっちまえ！！」的な声かな。そんなことを考えながら、頭目掛けて振り下ろされるバットを見ていた。

…取り敢えず、腕でガードしましたよ。

でも、痛い。

腕の痛みに怯んだ隙に、二本目のバットが目前に迫る。

防ぎ切れない。

”ぐあ…” 枯れ切った喉からは、叫びにならない声が漏れた。

…走馬灯。

来ないじゃないか。

死なない、のか？

頭は割れる程、痛いのに。

ちら、と一瞬だけ、流れた映像は。

よりによって、殺した女の苦しげな表情だった。

何てこった…。

俺は罪から、逃れられないって訳か。

妙に納得しながら、俺は意識を失って倒れ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6704x/>

twilight world

2011年11月26日23時46分発行